

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 14 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00033

研究課題名（和文）認識的、実践的、倫理的理由と信念の規範的身分の動的性格

研究課題名（英文）The Dynamic Character of the Normative Status of Belief and Its Relationships with Epistemic, Practical, and Moral Reasons

研究代表者

笠木 雅史（Kasaki, Masashi）

広島大学・人間社会科学研究科（総）・准教授

研究者番号：60713576

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の主要な成果は、3つに分類できる。第一に、これまで信念の合理性の阻却要因として挙げられてきたさまざまなものを統一的に説明するものとして、「阻却要因は主体が知識を持つことを否定する内容を持つ」という理論を提示した。第二に、「高階の証拠」と呼ばれるタイプの阻却要因候補が、信念の合理性そのものではなく、信念形成に導く探求の実践的合理性にかかわる理由であると指摘した。第三に、特に日本固有の文化的背景や日本語の独自の特徴が、知識の阻却や否定に与える影響を分析した。これらの成果は、現在執筆中の書籍に取り入れ、また論文としても刊行する予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

信念の合理性の阻却要因となるものはどのようなものなのか、そしてそれらがどのように信念の合理性を阻却するのかという点には、部分的な見解がさまざまに提示されてきたものの、統一的な説明は与えられてこなかった。本研究は、一部の阻却要因候補に新しい分析を与えるとともに、それらの統一的な説明を与えるという点で理論的な意義のあるものだと考えられる。また、この説明は、現実社会で問題となる見解の対立（特にインターネット上でのフェイクニュースの拡散や差別的行動）がなぜ生じ、しかも用意に解消可能ではないのかという点を（少なくとも部分的に）説明可能であるという応用的な意義も有していると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The main results of this study can be classified into three categories. First, it provided a unified explanation of the various factors that have been regarded as defeaters for the epistemic rationality of belief: defeaters have the content that the subject does not possess knowledge. Second, it pointed out that the "higher-order evidence," which has been regarded as a candidate for defeater for the epistemic rationality of belief in the literature, does not defeat epistemic rationality but practical rationality in inquiry. Third, it analyzed the influence of the specific cultural background of Japan in particular and the characteristic features of the Japanese language on the defeat and denial of knowledge attributions. These results will be incorporated into a book that is currently being written and will also be submitted to journals.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：認識論 知識 合理性 阻却要因 暴露論証

### 1. 研究開始当初の背景

信念の合理性(より広義には、その信念を持つべきかどうかという信念の規範的身分)は、主体が獲得する理由により強化されたり、減少したりするという動的な性格を持っている。これまでの認識論では、信念の合理性の強化は、主に「認識的理由」と言われる、信念の真理にかかわる理由によって行われるとされてきた。他方で、信念の合理性の減少の要因としては、さまざまなものが挙げられてきたが、それらがどのようにして合理性を減少させるのかという統一的な説明は十分に与えられてこなかった。こうした信念の合理性の増加と減少は、主体同士の見解の不一致や対立にも関係している。このような形の対立をどのように解消するのかを考える上でも、信念の合理性の増減の動的な性格を解明することが必要であると考えた。

### 2. 研究の目的

信念の合理性(より広義には、その信念を持つべきかどうかという信念の規範的身分)の減少は、認識論では、信念の合理性の「阻却」と呼ばれ、議論が行われてきた。しかし、信念の合理性の阻却要因となるものはどのようなものなのか、そしてそれらがどのように信念の合理性を阻却するのかという点には、部分的な見解がさまざまに提示されてきたものの、統一的な説明は与えられてこなかった。

本研究の第一の目的は、この不備を解消するために、阻却要因とはどのようなものであり、それらがどのように機能するのかを統一的に説明する理論を構築することである。本研究の第二の目的は、信念の合理性の動的な性格についての説明を、現実社会で問題となる見解の対立(特にインターネット上でのフェイクニュースの拡散や差別的行動)に適用し、なぜそれらが生じ、しかも用意に解消可能ではないのかという点を明確化するために用いることである。したがって、本研究は、単なる理論的研究だけではなく、その実際の社会問題への応用を目指すものである。

### 3. 研究の方法

本研究は哲学に属するため、第一の理論的な目的を達成するための基本的な研究方法は、先行研究を収集、読解、考察することを主とする。より具体的に言えば、(a) 先行研究において信念の合理性の阻却要因として挙げられているものを網羅的に収集し、(b) それらの阻却要因候補を統一的に説明する理論を考察する、という形で研究を行った。

第二の応用的な目標の達成のためには、(c) 現実社会での見解の対立についての具体例に上述の理論を適用し、どのように対立する人々の合理性の相互評価が対立につながっているのかを説明するという形で研究を行った。

### 4. 研究成果

3年間の研究期間は、コロナ禍によりさまざまな制約があった時期と重なったため、当初予定していたような国際的な研究者との交流や国際的な学会での発表が難しくなるという影響が生じた。

特に、本研究では、本研究の研究テーマにかかわる問題、分野を研究している研究者を国内外から集め、国際学会を開催することで、研究者間の交流を促すとともに、特に国内の若手研究者の研究支援を行うことも予定していた。この予定はコロナ禍で長期にわたり延期され、規模も当初の予定よりは縮小せざるをえなかったものの、最終的には2023年3月2~3日に広島大学を会場として「Knowledge, Rationality, and Defeat」と題した学会を対面形式で開催した。本学会ではアジア圏(韓国、台湾、シンガポール)から4名、日本国内から若手研究者を中心に6名を招き、研究者交流、若手支援という点では、大きな成果がえられた。

コロナ禍のために、研究の進捗にも影響が生じた。国内学会、国際学会での他の研究者との意見交換が難しくなったためである。しかし、オンラインでの交流、学会参加を行い、これも最終的にはある程度の成果が得られた。また、本テーマの研究の普及のために、Duncan Pritchard (2018) *What is This Thing Called Knowledge*, 4th Edition という代表的な入門書も翻訳し、刊行することができた(『知識とは何だろうか: 認識論入門』, 勁草書房, 2022年)。

本研究の研究成果としては、主に以下の5点となる。

- (1) 従来の研究で信念の合理性の阻却要因として挙げられてきたものを統一的に説明するものとして、「阻却要因は主体が知識を持つことを否定する内容を持つ」という理論を提示した。この理論の観点から、従来挙げられていなかったいくつかの新しい阻却要因の存在を指摘し、さらに、従来阻却要因の候補として挙げられていたもののいくつかは阻却要因ではないと指摘した。特に新しい阻却要因として指摘したものの中には、「その内容が真理値を持たないため信念ではなく、他の心的態度である」という真理値ギャップの存在を指

摘するものが含まれる。こうした真理値ギャップをもつ心的態度は、言語哲学やメタ倫理学で従来議論されてきた。本研究により、こうした他分野の議論と認識論を明確に接続できることが明らかになった。

- (2) 「高階の証拠」と呼ばれるタイプの阻却要因候補が、信念の合理性そのものではなく、信念形成に導く探求の実践的合理性にかかわる理由であると指摘した。この点を取り組んだ、信念の合理性の説明は、従来の説明とはかなり異なるものとなる。なぜなら、まずこの説明では、高階の証拠は実際には阻却要因ではないということになるからである。高階の証拠は、探求を進める要因となるが、実際にどのように探求が進められ、それが信念にどのように影響するのかは状況に依存する。そうした状況のなかには、信念の合理性を阻却する証拠を獲得することで、信念が合理的でなくなる状況も存在する。つまり、高階の証拠は信念の合理性の直接の阻却要因ではないが、探求を促すことで、間接的に阻却要因の獲得に通じる状況が存在しうる。高階の証拠は、このように従来考えられていたよりも複雑な形で、信念の合理性に影響を与えるということを明らかにした。
- (3) 只野真葛の思想を滝沢馬琴が苛烈に批判したという日本思想史の一事例を取り上げ、その事例を偏見によって女性の知識所有を否定するという認識的不正義の一例として分析した。認識的不正義についての海外の研究では、知的徳を育成することで偏見を是正することがその対策として示唆されている。しかし、本事例で興味深いのが、女性の知識の否定の背景に、男女間で徳は異なるという中国哲学由来の思想があることである。西洋哲学と異なり、中国哲学では徳についての理解の中に、女性に対する偏見や差別が入り込んでおり、それが日本にも影響している。このため、少なくとも過去の日本では、徳が認識的不正義の是正でなく、その促進をうながすこともあったという点に注意する必要がある。本研究により、あるタイプの認識的不正義の背景にある時代的、文化的要因を具体的に分析することができた。本研究は思想史的研究であるが、認識的不正義の形態やその背景が、文化や時代によって異なりうることを示す研究として、認識的不正義についての現代の議論にも貢献するものである。
- (4) 進化論的暴露論証と呼ばれる論証は、進化論的考察がある種の信念の合理性の阻却要因となることを指摘する。この阻却要因が正確にどのようなものなのかは、進化論的暴露論証のタイプごとに異なる。この進化論的暴露論証について2つの検討を行った。まず、進化論的考察により、ある種の信念が非合理的な直観のポストホックな合理化の産物であると示すことで、信念の合理性を阻却するというタイプの進化論的暴露論証について検討した。このタイプの暴露論証は、義務論への反論として提示されているが、ほぼ同様の論証が功利主義に対しても構築可能であり、功利主義の優位を示すものではないと指摘した（本研究は共同研究として行った）。次に、従来の暴露論証はすべて、抽象的な規範的内容をもつ信念の合理性を阻却するものに着目し、具体的な形で規範的であり、部分的に記述的な内容を持つ信念にはそれが及ばないことを確認した。その上で、後者の信念の合理性により、前者の信念も合理的であるということを示すことができる可能性を指摘した。つまり、暴露論証が提示する阻却要因をさらに阻却できる可能性が存在すると指摘した。
- (5) 知識を否定する「ムーア・パラドクス型の文」と呼ばれる文がどのように機能するのかは、英語と日本語で微妙に異なり、特に日本語では日本語固有の特徴により、知識を否定しない場合もあると指摘した。具体的には、日本語には英語には存在しない、心理動詞のアスペクト（する・している）、証拠性マーカー（そうだ、らしい、ようだ、など）があり、これらのどれを使用するかに応じて、ムーア・パラドクス型の文の語用論的・意味論的含意も異なる。これらの理由で、英語圏で考案された事例やムーア・パラドクス形式の文を日本語で発話したとしても、英語での発話と異なり、信念の規範や知識帰属の条件についての結論を簡単に引き出すことはできない。この研究により、従来行われてきたムーア・パラドクス型の文の分析が、英語に特有のものであり、普遍性を持たないことを示した。本研究については、まだ十分に分析できていない点があるため、今後も研究を継続する予定である。

これらの研究成果の多くは学会で発表したものの、いまだ論文として出版していないものが多いため、今後は論文ないし書籍として出版するように努める予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 笠木雅史	4. 巻 70
2. 論文標題 厚い評価と進化論的暴露論証	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 倫理学年報	6. 最初と最後の頁 68-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 7件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 笠木雅史
2. 発表標題 徳倫理学、徳認識論の再整理
3. 学会等名 ワークショップ「現代哲学として徳を研究する」、第81回日本哲学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 KASAKI, Masashi
2. 発表標題 Knowledge Account of Defeat
3. 学会等名 Frontiers of Epistemology Workshop（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 KASAKI, Masashi
2. 発表標題 Moore's Paradox and Norms of Belief and Assertion in Japanese
3. 学会等名 Workshop: Is Belief Weak?（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 KASAKI, Masashi
2. 発表標題 Defeating a Normative Status? Which One?
3. 学会等名 International Workshop: Knowledge, Rationality, and Defeat (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Masashi Kasaki
2. 発表標題 Archery and Liezi's Conception of Virtues
3. 学会等名 Symposium: East Asian Philosophy and Virtue Epistemology, American Philosophical Association Pacific Division Meeting (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Masashi Kasaki
2. 発表標題 Epistemic Injustice and Confucian Wisdom: A Case Study
3. 学会等名 Epistemic Injustice Meets Asia (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 笠木雅史
2. 発表標題 厚い評価と進化論の暴露論証
3. 学会等名 進化論の暴露論証 2020夏季ミーティング (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 笠木雅史
2. 発表標題 厚い評価と進化論的暴露論証
3. 学会等名 第71回日本倫理学会大会 主題別討議「進化論的暴露論証を通して見るメタ倫理学の最前線」(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 笠木雅史
2. 発表標題 さまざまな阻却理由とその機能
3. 学会等名 東北大学哲学倫理学合同研究室講演会(招待講演)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 ダンカン・プリチャード; 笠木雅史(訳)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 352
3. 書名 知識とは何だろうか: 認識論入門	

1. 著者名 鈴木貴之(編著), 笠木雅史, 和泉悠, 太田紘史, 鈴木真, 唐沢かおり(著)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 216
3. 書名 知識の実験哲学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	太田 紘史  (Ota Koji)		

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 International Workshop: Knowledge, Rationality, and Defeat	開催年 2023年 ~ 2023年
--	----------------------

## 8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------